

太宰治「作家生活に対する構へ、覚悟。」ほか

—— 太宰治と保田与重郎をめぐって ——

山内祥史

橋川文三氏に「太宰治と日本浪漫派」と題する文章があります。「国文学解釈と鑑賞」昭和三十五年三月号（第二十五卷第三号）の特集「太宰治・作家論と作品論」に所載されたものです。その「一」章で橋川文三氏は、亀井勝一郎氏の

太宰の最もきらつた人物は保田与重郎であり、保田の最もきらつた人物は太宰治であり、私自身には、この二人とも一向に要領をえない人物であった。保田のかくものは何が何やらサツパリわからず、太宰にはまだ会わなかつたが、その書くものは私には、軟弱で、生意気で、我儘で、氣どつていて、とうてい手に負えぬものと思われたのである。という一節を引用して、太宰治と保田与重郎氏の関係について、論じています。そこで橋川文三氏は、たとえば太宰治の「虚構の春」の「保田関係の書簡」を引用したあと、

以上のところから推定しうることは、保田と太宰のそれぞれユニークな個性の間には、絶交・和解といった多少ともドラマチックな要因が含まれていたということ、そして、にもかかわらず、両者は、ほとんど対極的な地点から、相互に一定の了解をいだいていたであろう、ということである。たとえば保田には「佳人水上行」というすぐれた太宰治論があるというし、また、たとえば次のような太宰観の暗示も書か

れている。

として、つぎのような保田与重郎氏の文章の一節を引用しています。

……「新潮」一月号が作家生活への覚悟を問ふてきたのに対し、僕は疾風迅雷には襟を正すといふ古言を以て答へた。あの回答二十名に垂んとしてみたが、中で文学への覚悟を語つたのは太宰治一人であつたと見える。本当に世渡りの秘訣は節度であるか、（略）僕は作家でないくせに二十名の仲間入りして文学生活への覚悟を語つてきざつばいことを書いてゐる。だが太宰治だけは文学へのはかない覚悟を書いてゐる。（略）（「日本浪漫派」昭和十一年二月号）。

橋川文三氏は、この引用のあと、

これらの手ちかな材料を見るだけでも、亀井のいうように、両者がたんに相互に「最も嫌つた」とだけ心えるのは正しくないことはわかるはずである。たゞ、亀井の観察にも幾分の理由があると思われる。というのは、太宰にせよ保田にせよ、それぞれ個性的な意味においてロマン的な人間であり、一種の「軟弱で、生意気で、我儘で、氣取つていて、とうてい手に負えぬ」というイロニカルなパースナリティを共有していたことは否定しがたいし、そのような個性においても、軽蔑や嫌悪、尊敬や愛着の心情は、亀井のように「古典的」な資質の

持主にそれと明確にうけとられるようにはあらわれないものだからである。いいかえれば、私見を押し出すことになるが、亀井の資質の中には太宰・保田というロマン的性格の機微にふれえないものがある、そのために、両者の関係のイロニイを感じることができなかつたのではないか、ということである。

と結論つけています。この橋川文三氏の結論については、いまはともかくとして、このような太宰治と保田与重郎氏の関係を、推測できる文章として、保田与重郎氏には「佳人水上行」(「文芸雑誌」昭和十一年四月号、第一巻第四号「太宰治を語る」所載)があり、さらには「太宰治氏の文学」(「新潮」昭和十五年六月号、第三十七年第六号)という文章もあります。加えて、橋川文三氏が引用したものととしてわたしが引用した「日本浪曼派」昭和十一年二月号の文章があるわけです。この保田与重郎氏の文章は、「日本浪曼派」第二巻第二号(昭和十一年二月一日発行)所載の「川柳永遠勝利説」と題する評論の、おわりの部分の一節ですが、これは、保田与重郎氏と太宰治の関係の考察のために重要な資料、というだけでなく、当時の保田与重郎氏の「作家としての心構へ・覚悟」に対する考えを推測するうえにも、重要な資料と思われまゝです。だが、それにもまして、保田与重郎氏が「文学への覚悟を語つたのは太宰治一人であつた」と語るその太宰治の「回答」自体は、さらに注目に価する貴重な資料と思われまゝです。しかし、その太宰治の「回答」は、現在までに刊行された「太宰治全集」には未収録であり、どの単行本にも、まだ収録されることがないのです。いわば、太宰治が、「作家生活に対する構へ・覚悟」を語つた資料、そして、保田与重郎氏が、「文学への覚悟を語つたのは太宰治一人であつたと見える」と判断する根拠の資料が、たやすくは目に触れえない状態にあるのです。保田与重郎氏のいわれる「新潮」昭和十一年の「新年特大号」(第三十

三年第一号、昭和十一年一月一日発行)の「目次」をみますと、「創作特輯二十篇」と銘うたれて、太宰治も「めくら草紙」を発表していますが、そのすこし後に、

作家としての心構へ・覚悟(回答)……………二〇四

と記されていて、二〇四頁をめくりますと、「作家としての心構へ・覚悟」という総題のもと、それぞれ無題で、平田小六、外村繁、島木健作、中村地平、保田與重郎、石川達三、福田清人、丸岡明、張赫宙、水松定、三上秀吉、北川冬彦、豊田三郎、太宰治、丹羽文雄、伊藤整、寺崎浩、真船豊徳、徳田一穂、田村泰次郎、那須辰造、荒木鏡、新田潤の、計二十三名の諸氏の回答が、この順番で、二〇四頁から二〇九頁にかけ、三段組で所載されています。このうちには、すでに全集の刊行されている筆者もあり、さらには作品集、著作集の刊行されている筆者もありますが、それらのいずれにも、この「作家としての心構へ・覚悟」は収載されておられませんし、またどの筆者の単行本にも、この「回答」は収録されていないようです。いわば保田与重郎氏が、「太宰治一人」と判断する際の、比較の対象となっている他の二十二名の諸家の文章も、すべて、容易には目に触れない状態にあるわけです。ここでわたしは、一括して、太宰治、保田与重郎氏の「回答」をふくめたすべての筆者の「回答」を、この機会を借りて紹介しておきたいと思うのです。

作家としての心構へ・覚悟

○

平田小六

恥しい話だが十月の或日の日記に次の如く私は書いてある。

「もの見高い観衆はた易く作家を英雄的興奮に祭り上げたがる。これに煽てられたら最後、彼はとんでもない方向に自分を運んで自滅する。

作家にとつては自分を滅す敵は意外にも味方の中に居ると知るべきだ」
「眞の處世法」表現をもたない眞實」

外村 繁

私が再び此の生活に歸つた時、私は丁度我が家へ久し振りに歸つたやうな沁々とした喜を感じました。さうして私は此の生活より他に自分の生きる道のないことを知りました。ですから今私は別に大した覺悟ともありませんが、ただこの生活を、何の疑ひもなくひたすら大切に生き切りたいと思つてゐます。以上

島 木 健 作

長距離選手たらうとする心構へが、かなり自然に自分の内部に成長しつつあることを、僕は、自分の近ごろの進歩であらうと思つてゐる。ものを書きはじめた當初はさうではなかつた。長距離選手でなければならぬといふことはわかり切つたことだが、氣持が、さう望むところとは遠いところにあつた。二十年三十年の先に目途をおいて、仕事を考へるといふやうなことがなかつたのである。その窮極の原因は、やはり當面の時代に負けてゐたところにあるとおもふ。自然な氣持から、長距離選手であらうとすれば、基本的な勉強ももつとするやうになるし、餘りつまらぬものを書きとばすこともないやうにならうし、文學の上でも生活の上でも少しの行き詰りぐらゐにあわてることもなくなるだらう。

中 村 地 平

お恥しい次第ですが、餓死してまで文學する、といふ覺悟が、今の

ところ、まだできて居りません。先日友人の家を訪ねたら、子供が病床に在り、薬も飲まし得ないので、子供が號泣してゐるのです。それを見て僕は、自分のことを後ろめたく思ひましたが、反面さういふ友人に全的には肯定できないものも感じました。持つて産れた才能も生かし得ない、自分がほんたうに爲たいこともできない、現代に、激しい憤りを感じますけれど、時代に負けないで、遅しく生き抜きたいと考へて居ります。

保 田 與 重 郎

拝復 先輩知友らのその日その日を傍より拝見いたしますに、氣の張りの辛さ、細細しきことに心勞するさま、我もかくあるかとうたいた感にうたれるものあり。尤も小生の如き近頃にして作家生活を稱するはをこがましきものとも存じられますが、折折にはむかしおぼろに憶えし、疾風迅雷には襟を正す、などいふことは考へをり、但しこの言葉は古聖の云ひし言葉とやや異りありやなしや確でありません。御返答まで。不一。

石 川 達 三

一、生活的には、貧乏に負けぬ、境遇に負けぬ事が必要と思ひます。どうせ貧乏はつきものと思はねばなりません。二、仕事としては各人各様の考へがあるでせうが、私としては、常に冒險を試みるつもりです。その爲には駄作が出来る事も亦可也と思ひます。そしてさうした冒險を試みるだけの氣力、野心、生活力を常に豊富に持つてゐたいと思ひます。

福田 清人

お尋ねの意味多様にとられますが、日常生活では平凡をさげ變化を求めたいと念じておます。仕事では自分の分を守りあとは天にまかせることにしてゐます。經濟的な方面でも苦しくても自分が好んで入つた生活だからと思つて成行にまかせることにしてゐます。しかしあまりみじめな最後はとげたくないと思つてゐます。

丸岡 明

何事にも屈することのない豪邁の精神と、底ぬけの謙讓な態度を、日常の心構へと致したく思つてゐます。餘程謙讓な態度でないことには、眞實など見抜けるものではないと考へます。

張 赫宙

文壇的雰囲気的全然無いところに住んでゐますので、文壇的刺戟を受けることは非常に稀薄です。しかし私は私自身や他の人達の生活を客觀的に眺めた時や、風變りな自然、他の土地の風土味などに接する場合など私の胸は藝術的衝動でわくわくしそれを表現せざんば已まないといふ状態になります。このことが、私としてこれまででもこれから、下手くそながら小説を書かす重要な原因になつてゐます。だから私は外部からの刺戟が全然なくとも、この内部の衝動さへあればよい譯ですが、もしこれがなくなつた場合、私の作家生活は勿論私の生命までもなくなるものと思へてなりません。

永松 定

私は大分長い間或る中等學校の教師をしてゐた。教師生活はさら

だに無味乾燥なものであらうが、私のそれは小説を書いてゐるといふことのために、二重に不愉快にされた。それで私はたうとう我慢出来なくなり、この春、そこを止し、筆一本で喰ふことに決心した。學校を止して早や一年近く、筆で喰ふことの豫想以上困難なことを知つたが、如何に困難とは云へ、自分の好きなことをしてゐるんだから仕方ないと思ふ。作家が視野を廣くし、社會人的訓練を受けるために何らかの實際的職業に就くことの可否が、先頃問題になつたやうであるが、私の場合は、さういふサラリイマン的の仕事に對して強い嫌惡、虚無感以外の何ものをも抱くことは出来なかつた。今のところ、私には文筆以外によつて生活する興味が全然なく、これがぎりぎり結着のところだから、前進するよりはか仕方がないのである。文筆によつて實際的に食へるか食へないかは別として、文學で無理にも喰はうとするところに自ら文學の發展もあるんぢやないかと自分としては考へてゐる。

三上 秀吉

討死の外なし。これは殺伐の意味でなく、作家は選ばれたものである故、高く楽しく勿體ない覺悟といふ抜け道があります。芭蕉は日頃の一句一句を辭世の句と致しました。

北川 冬彦

書いている間は、少くとも所謂作家生活の圏外にある現在の心的状態を、いつまでも續けたく思ひます。

豊田 三郎

これまで、私は個人的な生活を積極的にして來ました。戀愛、貧乏、病氣（例へば肺結核、トリツペルの如き、）その他の體驗も相當豐富であります。この上は社會的にアクティヴな生活にすすむ覺悟であります。

太宰 治

一、薄命たることを忘却し、ただ、ひたすらに、おのれの美人たることをのみ思ひたまへ。

一、竹林の七賢人は籟より出づべし。出でてわが身を都塵にまみれさせべし。

一、「へん、いい氣なもんだ。」さうささやかかれ、うしろ指さされて笑はれても、知らぬふりして通りすぐべし。之また、作家精神の重要な一エレメントなりと知るべし。

一、結論としては、つねに平和をこそひそやかに祈願すべき也。

一、われらブルジョア文學の佳きものは、完全なるむなしきものにして、その美は、およそはかなきものなり。これをしも、はじめから覺悟して取りかかつて居る者、思ひのほかにか少しと知るべし。「もしや。」などの助平心は、かたくつつしまさるべからず。

以上、「新潮」編輯者のお言ひつけの「作家の生活に對する構へ・覺悟。」といふ題にて。（「もの思ふ葦」より。）

丹羽 文雄

平凡無事な家庭生活を送りたいとは思はぬ。たとへ妻に子供が出來ても、別居生活をしてみたい。自分の作家生活を持続していく上には、家庭の人情など礙りとはす氣持である。一種の我儘のものには違ひない。

生活が無拘束であれば自づと書くものにも不健康な色彩が出る——これは健全な人間の求める方法ではない。さう言ふのは公式である。公式によつて作家精神の不感症にされることを、自分は何より怖れるものである。龍井さんのやうな強い性格人はまた別である。

伊藤 整

小生は文學評論も書きますので、創作と評論の食ひちがひを身に沁みて感じます。評論は全般的な概念をも扱はねばならないのですから、さういふものとして書いてゆく外ありません。小説はよし狭く低くつてもそれが自分の持ちものの生理である限り、そこにしがみついて、ただそこだけで書き破るほか進みやうがないので、自ら評論のやうに遍在することは出来ません。しかしモチーフはどこかで一致はしてゐるのでせう。以前に詩を書きましたが、詩と小説とは誠實の要求の仕方がほぼ同じだと思ひます。我儘な氣持の時は評論の外に書けません。

寺崎 浩

書けるだけ書いて生活してゆくより仕方がないと思つてゐます。人間のことゆゑ力の及ばぬこともあり。さういふ作品の出た時はやつつけられてもいい、次の作を期待して貰ふつもりです。いい作を書く時生活に穴が開いても仕方がない。經濟生活を二の次にして轉がつてゆくつもりです。

眞船 豊

あるイズムに参加する。それは必ず山の頂上に達し得るケーブルカーである。またある理論に従つて歩みを運ぶ。これもまた必ず頂上を

極め得る參謀本部地圖である。それは實に合理的であつて、一應作家としてその山の本體を見極め得たと思はせる。——ところが、作家の仕事は、ただそれだけで終るのでは無かつたと氣がついた時から、始めて、作家本然の仕事に入るのであり、作家特殊の苦業が始まる。——即ち山を見るのではなくして、山そのものに自分の全身を打つつけることの修業である、そこで折角、以上のものによつて運んだ自分をも一度一合目の下へ降ろさなければならぬ。全くそれは已れただひりの力に頼るのみである。心細い。頂上に達し得ないかも知れない——だがたとへ、二合目で倒れて了つても、三合目で谷に落こんで道を失つても、林の中に迷ひ込んで山の姿を見失つても……しかし、そこまで歩み通した道は、實に自分自身の力であり、精いつばいに體あたりして勝ち得た喜びであり、絶對的な自分の満足であり、自分の力に對する誇りであり、自負である。私は、この誇りを積みかさねる修業こそ作家の仕事であり、作家生活の覺悟は、このバカバカしい根氣を要する仕事から逃げ出さぬ心構へを持つこと、この監獄部屋に生き通すことと思ひます。

徳田 一穂

残念な事にまだ確固たる心構へや覺悟がきまり兼ねてゐるやうです。これは非常に複雑微妙なる問題で、私などこれまでこの動揺する心持からの行動を作品で取扱つてゐるくらゐですから、この問題は私の生活と共に作品自體の問題ともなつてゐる譯です。生來迂愚なる私ではありませんが、かかる時代に生き、作家として良心的でありたいと希ふ次第です。現實問題としては作家もこれからは何か生活的根據が必要であると痛感いたしてゐます。

作家としての私の場合は、これまでのところでは、種々な内部と外部との條件から、例へば經濟的な事情から、或は時代思想の狀勢などから、意慾が外部へ向かうとすると、その反動としてひたむきに内部へ向かうとするときとが、週期的に交替に来るやうに思はれる。この二つの場合とも同じく自我の經營には違ひないが、一方が盛んなときは一方が屏息しているかといふに、さうではなく絶えず裏側から奔出の機を狙つて脅威しつづけてゐるので、つねに一方が一方を監視し制壓しつづけるために空費する自我の熱量といふものは相當なものである。私はゲートルのやうに同時に二つのものを圓満に生かして行ける心境にまで到達出来たらと夢想してゐる。

那須 辰造

體驗に基づく感想をとのこと、新春の誌上を飾るべき質問に對してどうかとは存じますが、景氣よいお答へは出来かねます。病兒病妻をかかへ幾度か賣文業に身を任さうかと思つたか知れませぬ。作家は結局賣文家にすぎないとはいへ、自ら第一義的なものと第二義的なものとがあらうかと思ひます。幾度か決心し、その都度辛じて思ひ止まつて參りましたのです、がこれから先きもこのやうに優柔不斷のままでは過ぎるのではないかと考へます。どう轉ぶか、先きの事は先き任せであります。心構へ、覺悟などと景氣よい事は他人に任せ、以上いつはらぬお答へまで。

荒木 巍

まだ日も浅いこととて、「心構へ、覺悟」などははつきり出来て居りませんし、特別考へても居りません。ただ、精神的にも經濟的にも謙虛にしたいと思つてゐます。それと同時に、謙虛の偏向のために、屈伸性を失はぬやう、謙虛の裏に屈伸性を遣はせたいと、作家生活だけに、そのことを特に留意して居ります。

新田 潤

私は、作家ぐらゐ偉い者は世の中にはないと、小學生のやうに思ひこんでゐます。誰が何んと嘲つても、間抜け扱ひにしても、これは今のところ私の頑固な狂信だから仕方ありません。さうとも思ひこまずに、私のやうに地位低く薄給な身では、なほ昂然と、小説、小説と云つてばかりはをれません。早く勤めなんぞする必要もなく、作家生活にとつかり腰を据ゑたいものです。心構へ、覺悟、また自ら出来るでせう。

以上、すべて原文のまま引用したのですが、保田与重郎氏の一文は二〇五頁上段の所載。つぎの二〇六頁下段から二〇七頁上段にかけて、太宰治の文章が、所載されています。太宰治の文章には、ごらんのように、文末に（「もの思ふ葦」より。）と記されていますが、随想「もの思ふ葦」は、昭和十年八月一日より翌昭和十一年一月一日にかけて発表された、短章の集合からなるものです。右の太宰治の「作家の生活に對する構へ、覺悟。」は、昭和十一年一月一日発行の「新潮」に発表されたものですから、その「もの思ふ葦」の裡の一文として、太宰治の「随想集」に加えることのできるもの、とわたしは考えます。しかもそれは、保田与重郎氏のいわゆる「文学へのはかない覺悟を書いた文章として、作家太宰治の研究上重要な資料」と考へるものです。ここに「近代文学試論」の誌上を借りて、紹

介する所以です。